



臨床哲学のメチエ 臨床の知のネットワークのために

Vol.12 Summer/Autumn 2003

特集：哲学カフェ

臨床哲学のメチエ

臨床の知のネットワークのために
Vol.12 Summer/Autumn 2003

特集：哲学カフェ

ある晴れた6月東京・白金で行われた哲学カフェの報告・・・ 4

寺田俊郎

哲学カフェに参加して感じたこと・・・ 6

大洞真佐子

「哲学カフェ in 明治学院大学」報告・提言の対話・・・ 7

木下さくら / 西川勝

東方哲学カフェ見聞録・・・ 12

武田朋士

編集後記・・・ 14

特集

哲学カフェ ～ 対話で紡がれる哲学

【哲学カフェ in 明治学院大学】報告



メチエ12号では、2003年6月7日に東京白金にある明治学院大学で行われた「哲学カフェ」の報告、感想、提言をまとめました。

臨床哲学という試みのもと、哲学カフェは最初からその中心的活動の一つとして今日に至っています。「カフェ」という場所（もしくは便宜上、擬似的にそのような空間を設定しますが）はその特性上、開かれた場所です。開かれた場所で宣言される「哲学」。それは、その場所に集った人たちの対話によって、紡ぎだされていくものにほかならず、所謂哲学者は、そこでは主役とはなりえません。したがって、常に哲学的と形容しえる対話が成立しているとは限りなくなります。また、そもそも、「哲学的」とはいかなることをもって言われるのか、哲学研究者には繰り返し問われ続ける場所でもあるのでしょうか。そこに参加された一人一人が、その哲学カフェでどのような「哲学」を感じられ、その場所にどのような意味を見出したのか。今回掲載しているものは全て、同一の哲学カフェに参加された人たちのものです。様々な視点で同一の哲学カフェが切り取られることで、哲学カフェの豊かさを伝えることが出来ればと考えています。（編）

ある晴れた6月の夕方

東京・白金で開かれた哲学カフェの報告

寺田俊郎

一年ぶりに白金キャンパスで哲学カフェを開いた。今年のテーマは「ワールドカップの熱狂」。終わってみんなでビールを飲んだプラチナ通りの「ラ・ボエム」では、大型スクリーンにイングランドの試合が映し出されていた。それから一年 今回のテーマは「ケア」である。

「ケア」をテーマとしたのは、昨年に引き続き社会福祉学科の学生団体「ぷらちな苦楽部」の皆さんと臨床哲学の同僚で看護師の西川さんが参加してくれることになっていたことが主な理由である。実は私は「ケア」というテーマはあまり得意ではない。このことは、後で述べるように、今回のカフェのファシリテーションに影を落とすことになるのだが、しかし、「ケア」をテーマとして意義深い対話ができそうだという期待もあり、また、私自身も「ケア」について考えてみたいとかねてから思っていた。「ケア」は、臨床哲学の学生だったころ繰り返し議論になったテーマであり、高校の教員をしていたころ「心のケア」というフレーズが流行しはじめ、日々高校生を前にしていると「心のケア」が切実なものに感じられることがたしかにある一方、「心のケア」がどこことなく胡散臭いものにも感じられるという経験をした。今も「心のケア」というフレーズをよく目にするが、「心のケア」を掲げて何かをすることにはやはり違和感がある。

今回の参加者の多くは、私や西川さんが直接声をかけた人々だったが、学内の掲示を見て来た人々が思ったよりたくさんいた。なかでも嬉しかったのは、二年前私のソクラティック・ダイアログの授業に出ていた学生が二人、掲示を見て来てくれたこ

とだ。もっとも、そのうち一人は、カフェだから出入り自由だろうと途中でのぞいてみたものの、入りそびれて帰ってしまったと後で聞いた。また、掲示を見て臨床哲学に関係があるのかもしれないと思って来てみたら本当にそうだった、という嗅覚の鋭い人もいて驚いた。

さて、漠然と「ケア」をテーマとしたのでは話しくいだろうと思ひ、さらにテーマを絞ることにした。時間が十分あれば、その場で参加者の提案にもとづいて絞り込むこともできるし、その方が好ましいのだが、今回は時間が限られていたので、鷲田さんの著書の一節を「刺激」として用いることにした。「傷つけるケア」の一節である。私は、書かれたものよりも一人一人の具体的な経験を「刺激」とする方が好きだが、書かれたものを刺激とするのも悪くはないと思う。

対話が始まるとケアというものにさまざまな角度から光りが当てられた。さまざまなものの見方が語られ、聞かれること、一つの事柄を語るさまざまな語り方に気づくこと、それは哲学カフェの魅力の一つである。だが、それだけなら特に「哲学」カフェである必要はない。具体的な経験からその背後にある問いを見つけ、問うことができなければおもしろくないと思う。今回のカフェではいくつかそういう問いに触れるこ

とができた。哲学的思考への入り口があちこちに見えた。たとえば「ケアがケアでありうるかどうかを受け手次第だとすると、ケアの主体はなくなるのではないか」という問いである。しかし、私はその問いを参加者とともによく掘り下げて、哲学的思考へと入っていくことができなかつた。今までのカフェのように、参加者の発言と発言の関連がよく見えず、私なりに議論の流れの流れにまかせたり変えたりすることがうまくできなかつた。どんな話の流れになるかはやってみないとわからないからやむをえない面もあるが、私自身が「ケア」というテーマがあまり得意でないことが響いていたことは否めない。前もって何冊かの本を読み直し、ケアについて考えをめぐらして臨みはしたのだが、十分ではなかつた。ファシリテータはその都度のテーマの専門家である必要はもちろくないが、ファシリテータがテーマにある程度親しんでおくことは、対話がおもしろいものになるために大切なことであると改めて思う。

また、途中で入りそびれた学生がいたことも、今回のカフェの一面をよく表している。カフェというより授業のような雰囲気になってしまったのである。教室を使ったこと、休憩やテーブルごとの対話の時間を設けなかつたこと、ファシリテータの私を介したコミュニケーションのパターンを変えることができなかつたことなど、いろいろな原因が考えられるが、いずれも工夫や配慮で対処できたはずのことだ。反省を今後にかしたい。

とはいえ、思ったよりも大勢の参加者を得て、好評のうちに終えることができた。午前中から授業や研究会で忙しかつたにもかかわらず、対話に参加してくれただけでなく、会場や飲み物の準備をしてくれた「ぷらちな苦楽部」の皆さん、遠くから応援に駆けつけてくれた西川さんをはじめ臨床

哲学の同僚たちに感謝する。西川さんが来られることははじめからわかっていたが、さらに3人の若い学生さんたちが取材も兼ねて来られると聞いて、実は、少し緊張した。

私が関東に移り住んでから開いたカフェはこれで3回目になる。今回ほどにぎやかではなかつたが、一昨年は横浜キャンパスで「なぜ環境を守らなければならないのか？」、そして昨年は最初に述べたように、白金キャンパスで「ワールドカップの熱狂」をテーマに対話した。この次は、秋に白金キャンパスの学生ラウンジでカフェを開こうと、例の途中で入りそびれて帰ってしまった学生と話している。また、今回知り合いになった看護関係の人々との繋がりもぜひ生かしたい。

終了後、一年前と同じプラチナ通りの「ラ・ボエム」で話に花が咲いた。このお洒落なイタリアン・カフェを会場にしてみるのも、悪くないかもしれない。

(てらだとしろう)



哲学カフェに参加して感じたこと

大洞真佐子

哲学カフェに参加して、幅広い意見の中で私なりの新しい発見もあり、改めて「ケア」について考える機会が持ててよかったと思う。その中で、「ケア」はリパブリック（契約的社会）とデーモス（属性的社会）では、対等であっても質が違うのではないかと、参加者の意見を聞きながら思った。たとえば、リパブリックでは常に相手の立場に立った「ケア」を心がけなければならないが、デーモスの場合は、自分の立場も主張することによって、お互いに理解し合える面がある。そのことにより、時には「傷つけあうケア」も成立するのではないだろうか。

私自身、老人福祉施設に職員として在籍して、「より良いケア」を目指して満足を得られるように頑張ってきたという、多少の自負心があった。

しかし、今回の哲学カフェに参加して、今まで行ってきた「ケア」をインサイドワーク（自らを美化）にしないでアウトサイドワーク（自ら明確にして検証）して今後に生かしていくことの必要性を感じた。

哲学カフェには、「自分を見つめ直す」「色々な考えを知る」こと等よい機会であった。又、自分の考えを話すことで他の参加者が聴いてくれることによって「ケア」されたような気分も、哲学カフェのよさかもしれない。

身体的ケアや精神的ケアでも、受け手がホジティブに考えられるような「ケア」こそ大切だと思う。

人間は誰も回りに「ケア」され合って支えられていることを強く感じる。

これからも、相手の意図と違う「間違ったケア」も時にはあるかもしれないが、その人にとって本当に必要な「ケア」は何かを常に考えて接していきたい。

今回、大阪よりご参加いただき本当に有難うございました。

（だいどうまさこ 明治学院大学 社会福祉学科3年）

「哲学カフェ in 明治学院大学」

報告・提言の対話

木下さくら / 西川勝

2003年6月7日(土)に、明治学院大学白金校舎で行われた哲学カフェについて、参加したナース二人が対話風に報告します。

まず、今回の参加が、初めての哲学カフェ体験になった木下さくらさんの感想から。

木下さくら 西川 勝

「哲学カフェ」なるものに、初めて参加した。

哲学カフェという言葉も知らなかったし、哲学にはまるで縁がなかったわたしが何故、哲学カフェに参加したかということ、きっかけはひょんなことだった。わたしは、精神科ナースのための研修会や学会の企画・運営などの仕事をしているが、昨年、痴呆ケアの研修会講師として西川勝さんをお願いしたことがあった。彼から突然お誘いをいただいたのである。メールのタイトルが「哲学カフェのお誘い」だったので、かなりびっくりし、わたしなんかが行ってよいのか?と思ったりもした。職場の友人も誘ってみたが、誰一人として都合がつかなかった(余談だが、西川さんは研修会の資料として臨床哲学の修士論文を送りつけてきたことから、わたしの職場では「ちょっと変わった人」だと認識されている)。しかし、お気軽にどうぞ、とのことだったので、一人で明治学院大学へと向かうこととした。初めてのことであったので、わくわくしていた。



大学の講義室に机がいくつかの島に並べられ、お茶やお菓子が置いてあった。そうか、哲学カフェだからね。さておき、どうやら哲学カフェというものは、ひとつのテーマについて色々な視点からディスカッションするものらしい。ファシリテーターの寺田さんが進行役のようだ。人の意見をきちんと聞く、とか長々と人の言葉を引用しない、とかいうルールがいくつか設けられていた。鷲田先生の著書の一部をとっかかりにして議論が始まった。「ある人が『死にたい』と言ったとき『ほんなら、死ね』と言うことがある。その人はもう頑張れない自分を否定してほしいのだと思うから」という内容だったと思う。「死ね、という言葉はひどく暴力的な言葉だと思う」とか「関係性によるのかも」とか、その他いろいろな意見がとびかった。わたしは、それらの意見に対し、いちいち「そうだ、そうだ」「んー、それは賛同しかねる。」「これはどういう意味なのか?」など、内心は反応していたが、じっと様子をうかがっていた。

わたしは、どちらかというと言いたいことは言うタイプで、あまり遠慮してものを言う方ではない。発言しないのは、どうしてもグループの力動が気になってしまい、自分の話すことをまとめたりする暇がないからなのだ(もともと弁のたつ方ではないし)。グループの空気の流れだとか人間関係などが気になる。特に、話題の表舞台にたっていない人が気になる。発言が少ない人だとか、勇気を出して話している風な人の意見はついつい丁寧に聞く。逆に、そういう人をないがしろにする人には、怒りすらおぼえる。今回、いろいろな人が来ていたと思うが、こういう場合、慣れていない人が絶対的に不利である。大体、この「不利」というわたしの見方は偏っている。みんながしゃべりたいわけではなからうが、わたしには、控えめにしている人が「話したいのに話せない人」に写るのだ。ともかく、わたしの偏った持論からいうと、関係者は、グループや控えめな人を気遣うべきである。

そういう意味で、寺田さんという人は、かなりのキレモノと思われた。うまい具合に意見を要約したり、話題をふったりしていた。そのうち、西川さんが母親から「生きていて頼んだわけではない。ほんなら死んでしまえ」と言われたことが、逆に自分にとってはよかった、という話になった。かなりインパクトがあり、興味をひく。しばらくその話で盛り上がった。「傷つけるケア」というのも、わたしはそのような考え方になじみがなかったので、おもしろかった。相手を傷つけることがケアになることもある、という考え方。わたしは、相手を傷つけることは、傷つけるだけになることが実際には多いと思う。特に医療(とりわけ精神医療)の現場においては。その中で、傷つけることがケアになるための条件というのは何なのか? 偶然のこともあるだろうし、冒頭の題材となった文章は意図的な「傷つけるケア」だろう。傷つけることがケアにならない可能性があるとき、意図的な「傷つけるケア」は危険ではないのか。また、ケアになっていたことを確かめるにはどうすればいいのか……。

そんなことを考えるのと同時に、今日のテーマは「ケア」なのに、意図的に「傷つけるケア」がテーマになっている、と思い始めた。わたしのように「傷つけるケア」について、今初めて考える人たちはどんな風に考えているのだろうか。それが聞きたいと思ったが、このグループでは、西川さん始め「傷つけるケア」賛成派の意見が強い。「傷つけるケア」自体は興味深いが、反対派ではなく、初めて派や一部賛成派の意見も聞きたい。

また、寺田さんのファシリテーターは流暢だったが、西川さんに頼っている感じがする。一度そう思いこむと、もうだめだ。ただでさえ意見の強い西川さんに、さらに意見を求めているように思えてくる。

わたしは内心、「黙れ、西川」と思った。何度も思った。……どうも、すみません。

西川 勝 木下さくら

いやあ、のっけから強烈パンチを食らいました。しばし、沈黙考。

木下さんはお仕事柄、ナースの研修などで、グループワークの方法論にはご意見がおありですね。グループでの対話が実りのあるものになるためには、参加者が自らの体験を具体的に語ることも、それも言い難かった事柄について、それをしっかりと聴いてくれる人がいることに支えられながら、自分の考えをまとめ表現することが、何よりも大切だと、あなたからお聞きしたことがあります。

声の大きい強い論理が勝ちを得る議論や討論と違い、対話はそこに居合わせた人たちが、どれだけのことばを紡ぎだせるか、お互いが縦糸横糸になりながらひとつの織物を、ともに作りあげることができるかが大切になるのですね。

その意味では、ぼくはしゃべりすぎたのでしょうか。「傷つけるケア」など矛盾した考えだ、という意見に添うつもりもなく、戦闘的に自分の意見を主張しましたからね。意見のぶつかり合いに見えたのも仕方のないことだったと、今は思います。

あの日の哲学カフェは、大学の教室で黒板を前にして行われるという状況だったことに、ひとつの理由があるのかもしれませんが。ファシリテーターの寺田さんが大学の先生で、参加者に学生さんが多かったことも、カフェという自由な雰囲気からは遠いものを醸し出してしまいました。2時間近い対話が休みなく続けられ、緊張した稠密な時間の流れに参加者はのみ込まれてしまったようです。哲学カフェが始まる前からの緊張を解きほぐせなかった、というのが今回の反省点としてあげられると思います。ぼく自身も、寺田さんから誘われて大阪から東京へ出かけてきたからには、と妙な気負いがあったのも確かです。その気負いで、人の話に耳を傾ける余裕をなくしてしまいました。哲学は、意見の主張ではなく吟味の継続です。お互いの違いだけを際立たせるのでは、互いに吟味しあう場所は開かれませんか。

吟味を継続するために必要なことはなんのでしょうか。なによりも大切なことは、「途上にある」ことの自覚だと思います。実際の哲学カフェは、ある時間に始まり、ある時間には終わりを告げられます。限られた時間の中では、対話が深まらず空転してしまうこともあります。自分の考えを言えなかった、相手の言うことがわからなかった、という不全感も襲ってきます。みんなで考え始めた問いを、開いたまま終わってしまうのはしんどいことです。しかし、安易な合意や答えに寄りかかる怠慢は「哲学の死」を意味します。

「哲学なんか関係ない」と言われるかもしれませんが、ナイチンゲールも「看護は日々新たになければならぬ」と語ります。人が生きるうえで、何かを求めるといことが、何かを得たということよりも、より大きな生きる力になるのではないのでしょうか。

当たり前のように思っていたことが、哲学的対話のもとで新たな光を発しはじめ、その意味を再び考えたくなる。それが、ぼくの考えている「哲学」です。

また、悪い癖が出たようです。ぼくの哲学観の主張は、木下さんやほかの参加者が、感じたであろう「あのときの息苦しさ」を忘れていきますね。少しでも、これからの哲

学カフェが楽しい場になるために、いくらかの提言をしたいと思います。

* 緊張を解くには：場所の工夫（本物の喫茶店、屋外の公園、出入りの自由なところがいい）時間（余裕を持って参加できる時間帯、土曜の午後とか）環境（静か過ぎない、騒がしくない、目を休める絵や花、小物などがある）席（全員が、同じ方向を向かない。人の視線が気にならない。居場所をある程度自由に移れる）美味しい飲み物。気持ちよくそこにいられて、対話に集中することも可能だし、黙っていても気詰まりにならない雰囲気があること。その場にいることが苦しくいやになれば、楽に離れられることがポイント。

* 沈黙に躓かない：破るための沈黙と、そうではない沈黙との区別をどうするか。ファシリテーターだけでなく参加者が、それをどう感じ取り、どうするのか。あらかじめ話し合っておく。

（沈黙からことばが生まれるのを待つ場合、話の流れがよどみ迷った場合、話したくない人なのか、話せないと感じているのか、その他）

よりよい哲学カフェのためには、もっと多くの課題があるでしょう。ファシリテーターのスキルに関しては、参加者のことばと沈黙をどのように絡ませあうかという難題があると思いますが、今回は、ぼく自身にそれを語る資格はありません。

またまた、木下さくら 西川 勝

誘っていただいた身なのに好き勝手に言いまして、申し訳ありません。こんな風には書きましたが、西川さんが人の話を全然聞いていなかったとは思っていません。西川さんの、人をひきつける言葉にちょっぴり嫉妬したのかもかもしれませんね。考えてみると、年月がたつにつれ、「心地よい驚き」が少なくなってきたように思いますが、哲学カフェにはそれがありませんでした。わたしの行動範囲では決してめぐりあえないような考え方に触れ、うれしいびっくりをたくさん体験しました。目からウロコとよく言いますが、目新しいことを聞くだけでなく、その目新しいことについてその場で考え、ディスカッションできる場というのは、そうそうないと思います。間違いなく楽しい時間であり、後日、わたしは友人にこの日の出来事を熱く語っていました。これからも、哲学カフェが身近なところでひらかれることを楽しみにしています。

最後に、哲学カフェでお会いした皆さん、楽しい時間をありがとうございました。

西川 勝 木下さくら

こうして、文章で対話するというのも面白いものですね。哲学カフェには、まだまだ見つけられていない魅力的な方法があるように思います。また、テーマによっては参加者の感想も、ずいぶん違ったものになるでしょう。今回の「傷つけるケア」は辛口で毒のあるテーマでしたが、「恋愛」や「自由」についての哲学カフェもあります。本当は、参加した人たちが興味のあるテーマを決めるというのがいいのでね。

ぼく自身は、あらかじめテーマが決まっているのは、気に入りません。偶然性をどれだけ大切にできるかが、哲学カフェの自由さを守ると思うからです。

見知らぬ人と語り合うことなかで、今まで知らなかった自分にも出会ってしまうという経験こそが、哲学カフェの醍醐味なのかもしれません。真剣な対話が続くうちに、なじみの人にも全く別様の出会いをします。人と会うことでしか自分を知りえない。哲学にとっての対話の意味も、ここにあるような気がします。

木下さんは、ナース以外に三味線弾きの横顔がおりです。浪曲の相三味線をプロの師匠に弟子入りして修行中。最近は舞台にも登場しているのを存じています。

浪曲の魅力を存分に引き出す相三味線は、譜面もなく、相手の浪曲を聴きながら即興的に弾くのだと教えられました。浪曲と三味線は、曖昧模糊と融合するわけではなく、それぞれの持ち味をしっかりと表現しながら、それでもお互いがいなければ成り立たないほどに緊密な関係にある。孤立にも依存にも流れてしまわない相互関係は、対話にとっても重要な示唆を与えるものでしょう。



また、機会があればこのあたりのことを話してください。いつか、関東での哲学カフェで再会できることを楽しみにしています。

(きのしたさくら 社団法人日本精神科看護技術協会 教育認定部長)

(にしかわまさる 京都市長寿すこやかセンター 研究助手)

【哲学カフェ報告】

テーマ：「(傷つける)ケア」

進行役：寺田俊郎

於：明治学院大学白金キャンパス

東方哲学カフェ見聞録

武田朋士

去る6月7日、明治学院大学において寺田氏(明治学院大学助教授)進行のもと「(傷つける)ケア」のテーマで哲学カフェが開催された。以下は、それに参加しての報告および感想である。

哲学カフェとは、いくつかのルール(人の話すことをよく聴く(人の話をさえぎらない、指名されてから話す)、率直に話す(各々の発言・考え・感じ方の違いを大切にする、自分の言葉で話す(人の言葉を長々と引用しない、自分の経験・実感に基づいて話す))のもと、日常に即して普段考えていることを、一人でではなくみんなで、じっくりと、でもコーヒーを片手にリラックスして、考え、議論することを目的としている。

今回は、20名弱の参加者で、2時間半にわたって議論が行われた。

各自簡単な自己紹介とともに「ケア」のイメージを述べた後、議論への導入として数ページのテキストが配布された。事前に告知されていたテーマは「ケア」であったが、議論を「傷つけるケア」という方向へ持って行きたいという進行役のねらいから、鷲田清一氏の『老いの空白』(弘文堂 2003)の「置き去りにするケア」と題された箇所(196-203頁)がテキストとして選ばれた。その中の、ケアする側の人の「死ね」という言葉がケアになることがあるという部分が音読され、そのことについての感想を求める形で議論に入った。「傷つけるケア」としても恐らくもっとも極端な形のものと思われる「死ね」という言葉が提示されたこともあり、その言葉自体に反発を覚えるという意見もあったが、そのようなケアもありうるということが実体験に即した形で語られるなどして、議論はケアの成立を関係性から問うという形でほぼ展開されていくことになった。極端な形からケアが問われることで、そもそものケアの成立そのものが問われたことは、議論としてとても刺激的なものだった。ケアは送り手の意図とは関係ないところで成立するのか、ケアとは偶然の産物ではないか、何が傷つけることをケアにするのか、・・・。

本来ならば、ここからさらに問いを絞り込むことが出来れば、議論としては見通しやすいものになったのかもしれない。しかし、2時間半の限られた時間ではそれはなかなか難しいだろう。そのため、参加者にとっては最終的にケアについてのイメージが一変させられるもしくはケアについての考えが深まるというよりは、引っかけまわされて終わったという印象が強かったのかもしれない。しかし、無理をして中途半端にまとまったようなものになってしまってもいけないと思う。哲学カフェ終了後、ある参加者に感想

を聞いてみたところ、「同じテーマについて話していて、同じ言葉を使っているはずなのに、同じと見なされている中の「ずれ」が気になる。何かが「ずれて」先へ進んでしまっていたように思う。」という言葉が返ってきた。時間的に厳しいとしても、議論が展開して問いが深められていくという側面がなければ、哲学カフェという場所の意義は限りなく小さなものになってしまうだろう。しかし哲学カフェでは、展開されている問いが各々の参加者から離れたものになってしまっていないか、という点に特に注意を払わなければならないように思う。哲学カフェの「哲学」は決して専門性を帯びてしまった偏狭な意味のものではない。背景を全く異にする人たちに開かれた「哲学」である以上、そこでは、問いが深められることが求められると共に、常に、そもそも議論が成立しているのかどうかを反省されなければならないだろう。私に感想を語ってくれた人が感じた「ずれ」とは、そもそも議論が成立していたのかどうかという懐疑だと私は受け取った。ただ、各自の「ずれ」は、議論が展開されていく中でこそ露呈されていくものであると思う。各々の「ずれ」とは、互いに自分の意見を言い合い、それを単純に認め合うことで明確になるようなものではない。2～3時間という限られた時間の中で哲学カフェが哲学カフェとして成立するために求められるものは、大きい。

もうひとつ、今回の哲学カフェで気になったのは、テキストの存在である。テーマを考えれば、テキストによる導入という形は、一つの有効な方法であったと思う。ただ、あくまで導入という形でテキストが用いられたのではあったのが、哲学カフェ全体を通してどこかで影を落とし続けていたように思う。議論の中心にテキストがあり続けたというわけではないが、少し間違えばテキスト解釈をもって自分の意見とする危険性があるように感じた。それと同時に、テキストがどこか硬い空気をつくっているのかもしれないとも思った。哲学カフェにおけるテキストの役割ということもまた、考えていく余地のあることだと思う。

最後に個人的な反省。準備などのお手伝いもあって最初寺田氏に挨拶に伺ったそのときに初めて、大阪から手土産の一つも持参しなかったことに気がついた。哲学カフェに参加するために来たというのに、お菓子の一つでも持っていこうという気づきすら出来なかった私は、ケアに関する議論に少し恥ずかしさを感じながら参加することになった・・・(お菓子ははじめとして哲学カフェの会場のセッティングは、昨年度同じく寺田氏の下行われた哲学カフェに参加した方々が自主的に行ってくさっていたことを付け加えておく)。



(たけだともひと)

編集後記

編集という作業のそのイメージすらもたいして持っていない無知な状態から始めて、今、不恰好ながら何とか仕上げるに至りました。編集上の問題で読みにくいところも多々あるかとは思いますが、その際にはご意見をいただければと思います。今は、何とか仕上げる事が出来てほっとしています。

臨床哲学研究室に入って気がつけば半年。正直、何がなんだか分からないまま時間が流れていったという感じです。それでも、今回報告した東京での哲学カフェをはじめいくつかの哲学カフェ、その他臨床哲学研究室の活動に参加していくなかで、また、今回こうしてメチエの編集に携わることで、少しずつですが地に足を着けて考えることが出来るようになってきました。臨床哲学研究室として積み重ねられてきたものを受け止めつつ、しかしそこに溺れてしまわないように自分の言葉で、これから少しずつでも思考を重ねていきたいと思っています。

(武田朋土)

臨床哲学のメチ工 Vol.12 Summer/Autumn 2003

総編集：紀平知樹

編集：武田朋士

協力：高橋綾

大阪大学大学院文学研究科 臨床哲学研究室

560-8532 大阪府豊中市待兼山1-5

clph@let.osaka-u.ac.jp

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/clph/>